

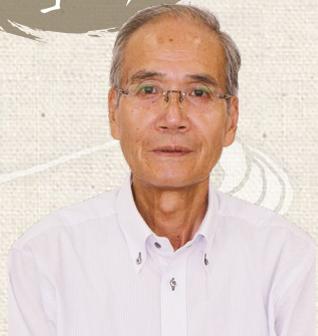


今回紹介する「語り部」さんは、大上久彦さんです。

大上さんの祖母のツイさんがイタイタイ病の認定患者でした。1945年(昭和20年)頃に発症し、1972年(昭和47年)3月に85歳で亡くなりました。

おばあさんを弟と二人で五右衛門風呂に入れ、入浴のお世話をされた思い出を中心に、当時の患者さんを取りまく環境や生活の様子などをわかりやすく語られる講話は、聴講者の心に深く響きます。

『私の抱負』大上久彦さん(71歳)



私の祖母ツイは、昭和20年頃からイタイタイ病を発症し、昭和47年に85歳で亡くなりました。いつも菅笠やごぞを持って農作業に従事していましたが、病気の進行とともに、腰がひどく曲がり、引き戸に掴まりながら廊下を這って家の中を移動していました。また、家族が寝静まった夜中に「イタイ、イタイ」と一人で訴えていたことを今でも覚えています。祖母は、お風呂が好きな人で、小学生であった私と弟が五右衛門風呂の準備をし、入浴時に背中を流してあげることでとても喜んでくれたのがよい思い出となっています。祖母が亡くなった際に親戚の人が「嫌いな薬を飲まなくてよくなった。痛い思いをしなくてよくなりよかった。」と言っていたことや父親が火葬後に残った骨の量の少なさに驚いていたことが私にはとても強く印象に残っています。

私は、祖母がイタイタイ病という公害により、長期間苦しみ、悲痛な思いで亡くなったことが残念でなりません。この事実を風化させないよう、イタイタイ病の恐ろしさやその悲惨さを次世代に語り継いで行きたいと思い私は語り部として活動しています。資料館への来館が、公害の恐ろしさや健康・命の大切さについて学校や家庭で話し合うきっかけにづくりになることができると思っています。

語り部講話の聴講者を募集しています
対象は10名以上の団体で、事前申込が必要です。
詳しくは資料館のホームページをご覧ください。



語り部講話の感想

おばあさんが亡くなった時に親戚が言っていた「死んで楽になってよかった」という言葉が、イタイタイ病の辛さや怖さを物語っているのだと思いました。
(中学生 女子)

ご家族を実際に看病されたご苦労や貴重な体験をお聞きし、イタイタイ病の怖さ、患者・家族の無念さがよくわかりました。
(60代 女性)

イタイタイ病になってしまった方の心境及び患者を介護されたご家族のご苦労を考えると公害の恐ろしさを再認識しました。
(70代 女性)

